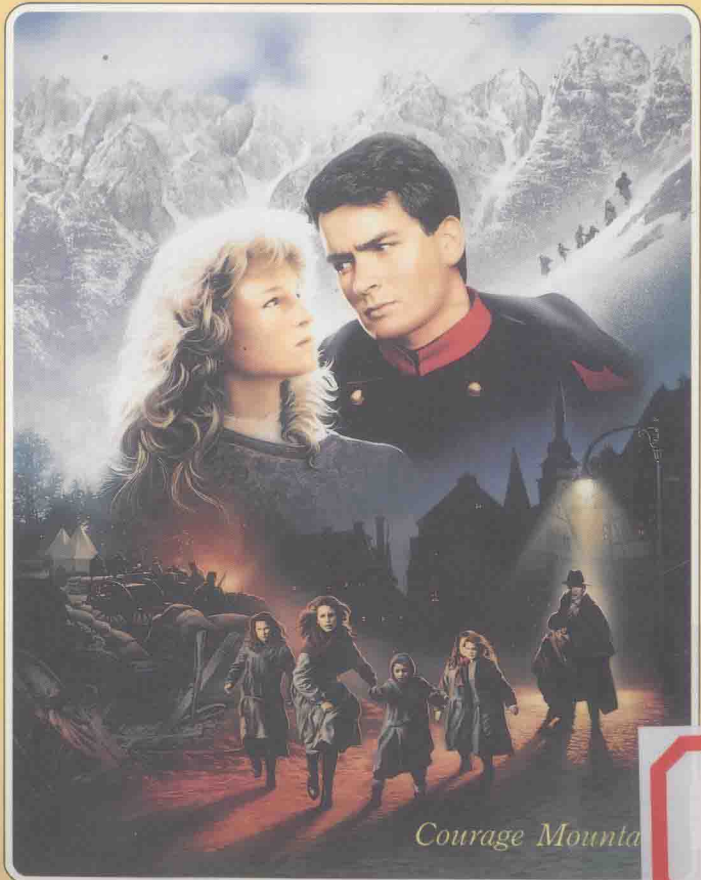


ハイジの青春 アルプスを越えて

フレッド&マーク・ブローガー／堀内静子訳



訳者略歴 明治学院大学大学院卒
英米文学翻訳家 主訳書「疑り屋
のトマス」リーヴズ「奥様は失踪
中」ブレット「旅行者」カツエン
バック「女ひとりトルコ・イラン
の旅」ドッドウェル（以上早川書
房刊）

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy
YR=Young Romance
GB=Game Book

ハイジの青春 アルプスを越えて

〈NV589〉

一九九〇年八月十日 印刷
一九九〇年八月十五日 発行

（定価はカバーに表
示してあります）

著 者

フレッド・ブローガー
マーク・ブローガー

訳 者

堀 内 静 子
ほりうち しずこ

発 行 者

早 川 浩

発 行 所

株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町二ノ二
郵便番号 一〇一
電話 東京（二五二）三一一（大代表）
振替口座番号 東京六、四七七九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求
めの書店にてお取替えいたします。

印刷・三松堂印刷株式会社 製本・株式会社明光社

Printed and bound in Japan

ISBN4-15-040589-1 C0197

ハヤカワ文庫NV

〈NV589〉

ハイジの青春 アルプスを越えて

フレッド・ブローガー & マーク・ブローガー

堀内静子訳



早川書房

2854

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1990 Hayakawa Publishing, Inc.

COURAGE MOUNTAIN
The Further Adventures of Heidi

by

Fred and Mark Brogger

Copyright © 1990 by

Fred Brogger and Mark Brogger

Translated by

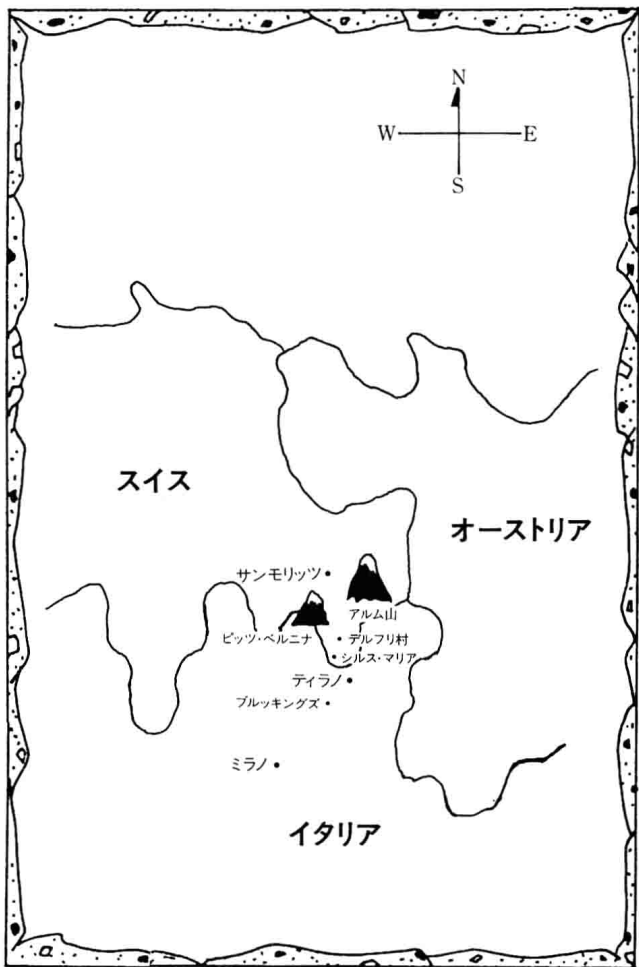
Shizuko Horiuchi

First published 1990 in Japan by

HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by
arrangement with IMAGE COMMUNICATIONS LTD.
through THE ENGLISH AGENCY (JAPAN) LIMITED.

あの山を越えられるようになった
バーバラ、クリステーン、グレッグ、
カレン、ウォルトへ



ハイジの青春 アルプスを越えて

きらめくスイス・アルプスのはるか上にひろがる、澄みきった明るい空へ、一羽のタカが高く舞いあがった。タカは翼をかたむけ、壮麗な峰のあいだを楽々とすべるように飛び、やがてゆるやかに下降しはじめた。下のほうにデルフリ村がある。シャレー風の家々が、午後の光をあび、黄色、青、サーモン・ピンクなど、鮮やかな色がひとときわ映えて美しい。タカはさらに低く、教会の尖塔の上を飛んだ。ちょうどそのとき、村でいちばん高いその尖塔の鐘が鳴りはじめ、一九一五年十月のその日が終わり、夕べの祈りの時がきたことを告げた。タカが鐘の音から遠ざかり、デルフリ村の上にそびえるアルム山へと舞いあがるころ、勤勉な村人たちが感謝をささげ、お祈りをするために教会へと向かいはじめた。村人たちは、自分たちの国、スイスが、三つの国境で荒れ狂っている戦争の脅威を、いまのところ、まぬがれているので感謝し

ていた。

アルム山の上のほう、巨大な岩棚いわだなの上にきこりの大きな山小屋があり、はるか下の谷とデルフリ村を見おろしていた。それは岩の上に建てられ、アルプスの風や雪にさらされても、これから何百年ものあいだ、そのままの姿をとどめていられそうだった。いたるところに野生の花が咲いていた。

風雨にさらされたいかつい顔の老人が、上の氷河ひようがからつづく細い小道をおりてきたが、ふと足をとめ、下の谷を見わたした。老人はアルム山の中腹ちゅうふくに自分の手で建てた小屋を見つめ、数年まえに孫娘のハイジがはじめてやってきたときのしあわせな思いをつくづくかみしめた。むかし、老人は山の上で暮らす偏屈へんくつな世捨て人で、人間という人間を、そしてありとあらゆるものを、憎んでいた。そこへハイジがやってきて、また老人の心をひらかせたのだった。老人はハイジがアルムを去るのだと思い、深いため息をついた。あす、ハイジはイタリア行きの列車に乗り、新しい世界へ向かうことになる。ブルッキングズ女子学園に入学するのだ。ブルッキングズ女子学園は、イタリアのティラノにある有名な私立寄宿学校で、フランクフルトに住むハイジのいとこのクララと、クララの家族が入学の手つづきをしたのだった。

老人はハイジが私立の女子校に入るのだと思い、顔をしかめた。きっとハイジはなじめないだろう。ハイジが行きたがっていないのは知っていたが、老人はせっかくりっぱな教育を受け

るチャンスにめぐまれたのだから、ちゃんと考えてからきめるように、としきりにすすめた。だけど、きめるのはハイジ自身だよ、おじいさんはむりに行けとは言わないからね、と老人は言った。老人のはるか上でタカが輪を描き、低い声で鳴いた。まるでアルムのタカが、ハイジは正しい決心をすると告げて、老人を安心させようとしているみたいだった。老人は顔をほころばせた。わかったのだ。老人はタカに手をふり、小屋に通じる小道をまたくだりはじめた。

アルムの小屋のなかで、ハイジは、学校にもっていてもよいものについて書かれているブルッキングズ女子学園からの手紙を、夢中になって読んでいた。ハイジはいま、自分用のちいさな椅子^{いす}にすわっていた。きれいに掃いた^は木の床に、半分まで衣類がつめてある旅行かばんが、ひらいたままおいてある。旅行かばんのそばで、ハイジがかわいがっている白いヤギのシュワンリが、うさんくさそうな目つきをしていた。シュワンリはいま目のまえにあるもののせいで、ご主人さまが遠くへいってしまふのだと感じていたのだ。シュワンリはやさしい茶色の目に、ほんとうに遠くへいってしまうの、とききたそうな表情をうかべてハイジを見あげた。でも、答えはなかった。ご主人さまはまだ紙きれをながめている。シュワンリはハイジの手に鼻をこすりつけた。ハイジは顔をあげてにっこりした。

「こう書いてあるわ。ヘペティコート三枚、ナイトガウン三枚、コットンのレギンス五組、ほかに日記か、好きなおもちゃ、本を持参^{じさん}してもよい」シュワンリ、なんにもかもっていくわけ

にはいかないの」

ハイジはまだ手紙をもったまま、椅子から立ちあがり、旅行かばんから古い縫いぐるみと木製のティー・セットをとりだした。

すこしいらいらして、ハイジは大きな木製のテーブルと、暖炉と、すみにおじいさんのベッドがあるひろい部屋から、屋根裏部屋へ通じる粗けずりの階段へいった。ずっとまえ、ハイジがアルムへきたときには、ぐらぐらしたはしごがあるだけだった。だが、ハイジが大きくなると、おじいさんは心をこめて頑丈な木の階段をつくった。ハイジが階段をのぼりはじめると、シュワンリはかばんのなかを点検することにきめた。

ハイジの寝室しんしつになつてゐる干草置場はしくさおきばは、ひさしのすぐ下にあつた。ハイジの仕事のひとつは、毎朝、干草を変えて、いつも新鮮でいい香りがするようにしておくことだった。ハイジはいま、ティー・セットと縫いぐるみをちいさな棚にのせて、子どものころからのおもちゃにさよならを言った。その干草置場はハイジの魔法の場所だった。ベッドのとなりにあるまるい窓からは、谷からデルフリ村までぜんぶ見たせた。このながめがきつといちばんなつかしくなるわ——ううん、おじいさんのつぎになつかしくなるわ、とハイジは思った。その魔法の窓がある干草置場は、ハイジが夢想むそうにふける場所で、ここにはクララから送られた本もおいてあつた。

ハイジはブルッキングズ女子学園からの手紙を見た。「いったい、どんなところかしら」と

ハイジは思った。なにか学べると思うと胸がおどった。ちいさな村の学校では、いつもいい成績をとっていた。だけど、いまはその学校も卒業したし、新しいものごとや考えを知りたくてたまらなかった。ブルッキングズ女子学園のことは、新しい冒険というふうに考えるべきだとわかっていた。おじいさんがそう言ったのだ。心の奥で、ハイジはおじいさんが正しいことを知っていた。

おじいさんはもうハイジのことを、わしのかわいい嬢ちゃんと呼ばなかった。わしの若いレディと呼ぶようになっていた。ハイジはそのことについてすこし考えてみた。本をたくさん読んでいたので、おとなの男のひとと女のひとのことは知っていた。おとなの男のひとと女のひとが恋をして、いつか結婚することも。

「きつと若いレディは寄宿学校へいかなきゃならないのね。それに、あたしはもう十四歳だもの」ハイジは声にだして言った。頭のなかでうなずきながら、ブルッキングズの手紙をひらき、リストをしらべた。

「ブルッキングズ女子学園の生徒は、例外的な寒さにそなえて、各自がよぶんな毛布を持参すること」ハイジは読みあげた。わらのベッドをおおっている羽ぶとんに目をやり、頭のなかでかぶりをふった。あれを旅行かばんにつめるのはむりよ。それでも、ハイジは羽ぶとんをかかえて階段をおりた。シュワンリがハイジを見て、それまでやっていたいたずらをやめた。

ハイジの数すくない服が、部屋じゅうに散らばっていた。

「シュワンリ！」ハイジはどなった。シュワンリは大事にされているペットが、どなられたときにすることをした。必死になって、あいているドアから外へとびだしたが、口にハイジのたった一枚のフランネルのナイトガウンをくわえたままだった。「おまえはバカなヤギだわ。さあ、それをかえして」ハイジは叫び、羽ぶとんを落としてシュワンリを追いかけた。

おじいさんは午後の仕事ときめている、日課の薪割りまきをしていたが、顔をあげて笑いだした。シュワンリが前後ろへとちょこちょこ動いて、ハイジから逃げようとしていたのだ。もう、こうなるとゲームだった。「つかまえて、おじいさん」ハイジは頼んだ。だが、これはなかなかむずかしかった。すばしこい、ちいさなヤギは、ハイジとおじいさんから楽しそうに逃げまわり、さんざん追いかけられてから、ようやくつかまった。ハイジはナイトガウンをしらべた。「シュワンリは、あたしがいなくなるのがいやなんだわ。あたしのものを旅行かばんからくわえだして、部屋じゅうに散らかすのよ」

おじいさんは笑みえをうかべた。「遊びたいだけだろう。氷河までつれて行って、ペーターに会っておいで。そしたらシュワンリには一日ぶんの運動になるよ」

ペーターに会えると思うと、ハイジはうれしくなったが、荷づくりを思い出した。「そうしたいわ、おじいさん。でも、することがいっぱいあるの」ハイジはシュワンリをにらんだ。

「わしがやっておくよ。それに、おまえはどうぶん氷河を見られない——おまえがあす出発するつもりでいるならね」

ハイジはおじいさんの顔をじっと見つめたが、いつものように、おじいさんの表情は読みとれなかった。

「ブルッキングズにはいけそうもないわ。いやらしいリストに、毛布が必要だって書いてあるけど、あたしの羽ぶとんは旅行かばんに入らないんですもの」

「わしの毛布をもっておいき」おじいさんが答えた。

「おじいさんがごえちやうわ！」

「まさか」おじいさんはやさしく言った。「ハイジ、決心したのかい？」

「氷河にいくってこと？」

「いや。……ブルッキングズだ」おじいさんは辛抱強くしんぼう答えた。「ハイジ、クララの家族からのお金は贈物だ。罰じゃないんだよ。おまえの教育のために使ってはどうかとわしが言ったのは、なにが起ころうと、自分で自分のめんどろをみられるようになってほしいからだ。わかるね？」

「ええ、おじいさん」ハイジはすこしうつむいて、やっと答えた。

「だが、わしを喜ばせるためにブルッキングズへいくのはいけない。そんなことをしたら、

おまえは、意地悪なおじいさんがあたしをここへこさせた、と考えるようになる」ハイジは思わずにつこりした。「そしたら、ブルッキングズですごす時間はむだになってしまいうし、かわいそうなシュワンリを、意味もなくさびしがらせることになる」おじいさんのいかつい顔がほころんだ。おじいさんが手をひろげると、ハイジはおじいさんの大きな腕にとびこんだ。おじいさんはハイジの髪をなでた。

「行くか、とどまるか。自分で決心しなければいけない……ここで」おじいさんは自分の心臓のあたりを指さした。「おまえがどんな決心をしても、わしはみとめるし、それ以上はなににも言わない。さあ、お説教はおわりだ。ペーターをさがしにいきなさい」

ハイジは爪先立ちしておじいさんにキスした。「大好きよ」とハイジは言った。

おじいさんは深く心をゆさぶられたが、おもてにはなにもあらわさなかった。アルムの上にある氷河のほうを指さして、「おいき！」と言うと、ふざけるようにハイジをおした。おじいさんは、すぐ後ろにシュワンリを従えて山の小道をかけあがっていくハイジの後ろ姿を見まもった。やがて、ゆっくりと仕事にもどると、規律正しい動きで丸太を割りはじめた。

ハイジとシュワンリが氷河に近づくころには、太陽が傾き、高いアルムのあざやかな秋色がひとときわ深みをおびて見えた。ハイジはきついおぼりのために、息がきれたので、足をとめた。

氷河のほうに目を凝^こらして、ペーターと、ペーターが牧草地のやわらかい草を食べさせるために、毎朝デルフリ村から、こんなに高いところまでつれてくるヤギのちいさな群れを見つけようとした。だが、ペーターも、ヤギもいなかった。ハイジは顔をあおむけて、はじめてデルフリ村にきたときにペーターがおしえてくれたタカの鳴き声をまねようとした。これまで、正しくまねたためしがなかった。ペーターに言わせると、ハイジの鳴き声は気^け高^{だか}いアルプスのタカではなくて、けがをしたニワトリにそっくりなのだ。それでも、すこしすると、ハイジに^{こた}えるペーターの鳴き声が聞こえてきた。

ペーターとヤギの群れは、頂上に近いちいさな牧草地にいた。ペーターは手をふり、ハイジとシュワンリは、いちめんに咲いている高山植物のあいだを走っていった。ハイジはペーターの横に倒れこみ、シュワンリはじっと見つめている仲間のヤギたちのあいだに入ってしまった。「あなたがこんなに高いところまでくるなんて、あたし、知らなかったわ」ハイジは息をきらして言った。ペーターは笑った。十八歳になり、背が高く、運動選手のようにしなやかで、もうりっぱな若者だった。ペーターはハイジの髪をくしゃくしゃにした。

「やめてよ！」ハイジは大きな声をあげた。「そうされるのきらいだって、ちゃんとわかってるじゃないの」

ハイジは野生の花をひとつかみとると、ペーターに投げつけた。花におおわれたまま、ペー